移動する生からみる日本の教育・就労（１）

―ブラジルに帰国した人びとの主観的な意味づけから―

一橋大学大学院　山野上麻衣

１．目的

「移民の受け入れ」に際し、公教育への包摂は統合をめぐる鍵として重要なものだと考えられている。日本においては、第一世代であるニューカマーの親が不安定雇用についていたり、あるいはブラジル人を中心として「雇用」ですらなく業務請負の形態で働くことが多い。そのなかで第二世代は学校から新卒正規雇用という日本的な標準型移行ルートにのることで親世代のおかれた状況から脱出することを期待、推奨される。他方でブラジル人の子ども若者に関しては、不就学問題や高校・大学進学率の低さ、あるいは明確な帰国予定なくブラジル人学校に通う子どもたちの存在が指摘される。これらの事象は学術的にはおもに支援の欠如として、現場の言説レベルでは当事者の意欲や努力あるいは計画性の欠如として語られてきた。しかし、日本社会で学齢期や青年期を過ごしながらも標準型移行ルートにのらないことへの当事者の主観的な意味づけはあまり検討されてこなかった。彼（女）たちは、なぜそのルートにのらないのか。本報告は、当事者の教育や就労への意味づけを明らかにする作業を通じ、日本における外国人の子ども若者の教育・進路の問題化のありようを再検討することを目的とする。

２．方法

学齢期から青年期にかけてブラジルから来日し、日本で一定の期間教育を受けたり就労したりした後に、さまざまな事情でブラジルに帰国した人びとへのインタビュー調査を現地にて行った。

３．結果

多少のバリエーションはあるものの、彼（女）たちにとって、間断なく特定の年齢で進学・就職することや、日本的な意味での教育を通じた職業地位達成へのこだわりは概して低い。ブラジルでは学校教育を終えたのちに就労へというライフコースが必ずしも定型的ではなく、学ぶ必要があるときに学ぶとの意識がある。また、就労は自己実現を賭け人生の中核に位置づけるものではなく、食べていくために行うものであるという考え方が広く存在している。子ども時代に日本の学校教育を受けることで日本的な価値観にさらされ、その価値に取り込まれる場合もある。それでもなお、帰国して改めてブラジルで暮らすなかで、その価値を緩和し調節しながら生きていく人びとの姿が見出された。

４．結論

第一世代同様の不安定・劣悪な労働環境から抜け出す道は学校教育を通じた正規雇用しかないと考える立場からは、標準型移行ルートにのらない彼（女）たちは逸脱者であり、理解不可能な他者となる。しかし労働環境の劣悪さや不安定雇用はそれ自体が問題なのであり、教育を通じて一部の個人が脱出することが解なのではなく、労働や社会保障のあり方としての問題化が必要である。それを放置したうえで、安定雇用が過去のものとなりつつある今日においてその限られた「地位」の確保に向けて子ども若者を焚き付けていくことは、社会を一層息苦しいものにしていくばかりか、当事者の間に分断を生む。そうならないための教育のあり方――個人として勝ち抜けさせることを志向する教育ではなく、日本社会の価値にとらわれない人びとが、その視点を活かしながら、みずからの置かれた状況を相対化し、不公正さを言語化し発信できるようになるための教育を目指すことが、日本社会を変えていくために必要ではないかと考える。